

『平家物語』南都炎上に関する一考察

—異本間の配列異同問題を中心に—

呉 起 燾*

目 次

1. はじめに
 2. 南都騒動の経緯
 3. 南都炎上の真相
 4. おわりに
-
-

1 はじめに

『平家物語』の冒頭に「おごれる人」「たけき者」の系譜の延長線上に清盛を位置づけて、「久しからずして亡じ」人物の具体的な例として清盛を暗示している。そして、物語は前半に清盛を中心とした平家の悪行が描かれ、後半にその結果としての平家の滅亡が描かれていることは、諸本の記述の差異にも関わらず、誰もが認めることだろう。

しかし、こうした物語の構図を大枠では認容できるものの、『平家物語』の諸本のすべてが、清盛を全く同じように描いているわけではない。清盛の行為は、系統によっては異なる叙述態度で記されているのである。すなわち、平家一門の凋落滅亡の因となるべきはずの棟梁清盛の行為について、ある系統の本では正当性さえも一部感じさせる記述となっている場合もないではない。そしてそのような文脈に置かれた清盛は必ずしも大枠の因果律、すなわち、その悪行が一門を滅亡にみちびくという因果的構図に沿って描かれてはいないことになる。

そうした清盛形像の違いを示すものの一つとして、平家の没落滅亡の一因ともされる、奈

* 順天青巖大学 助教授 日本中世文学

良焼滅の出来事がある。しかし、その事件に至るまでの経緯をみると、少なくない諸本間の異同が見られ、系統によっては清盛を仏敵視し非難しようとする意志の存在を疑わせるものがある。すなわち、大杵における仏敵としての清盛造型についても、彼を擁護・弁護しようとする意図さえ感じさせるものがある。諸本を区分して語り本系と読み本系に分けるならば、語り本系の諸本にその傾向が見られる。

本稿では、覚一本でいえば、巻第五「奈良炎上」に当たる話の南都焼滅に至るまでの経緯の諸本における叙述の違いに着目して、語り本系と読み本系における清盛造型の違い、さらにはそこから見えてくる志向する方向の違いについて考えてみたい。

2. 南都騒動の経緯

覚一本によって奈良炎上の発端と関連した記事を確認するとこう記されている。

高倉宮の謀反の際、興福寺の大衆が同調したことで興福寺も三井寺も攻められるだろうという噂が立つ中、興福寺の大衆が蜂起したため、摂政基通が「存知の旨あらば、いくたびも奏聞にこそ及ばぬ」（巻第五「奈良炎上」）と言って宥和策に出るが、大衆は全然耳を傾けようとしなない。さらにその使いとして、最初は右官の別当忠成、次に右衛門佐親雅が派遣されたが、二人とも乗物から引きずり落とされ髻を切られそうな恥をかかせられて逃げ帰った。南都大衆の狼藉はそれにとどまらず、ついに清盛を侮辱するに至る。

又南都には大なる球丁の玉をつく(ッ)て、これは平相国のかうべとなづけて、「うて、ふめ」な(ン)どぞ申ける。「詞のもらしやすきは、わざはひをまねく媒なり」といへり。この入道相国と申すは、かけまくもかたじけなく当今の外祖にておはします。それをかように申ける南都の大衆、凡は天魔の所為とぞ見えたりける。入道相国かよの事どもつたへきゝ給ひて、いかでかよしとおもはるべき。(覚一本・巻第五「奈良炎上」 p.381) 1)

この清盛に向かった大衆の狼藉について、覚一本は「天魔の所為」のようであると記し、南都大衆に対する非難の意を明確に示している。さらに、この騒ぎの後の記述をみると、大衆の乱暴はますます激しくなり、結局は清盛の遣わした重衡によって南都の諸寺は焼き滅ばされてしまう。覚一本に記されたこのような過程を見れば、物語が単純に南都を焼滅した仏敵としての清盛形像を志向したとは考えがたいのである。それは次のように大衆の悪意に満ちた侮辱にもかかわらず辛抱して平和的に南都の騒ぎを処理しようとする、次のような清盛の態度にも示されている。

1) 日本古典文学大系『平家物語』（校注 高木市之助 小澤正夫 渥美かをる 金田一春彦 岩波書店、1959年）

入道相国かよの事どもつたへきゝ給ひて、いかでかよとおもはるべき。かつがつ南都の狼藉をしづめんとて、備中国住人瀬尾太郎兼康、大和国の検非所に補せらる。兼康五百余騎で南都へ発向す。「相構て、衆徒は狼藉をいたすとも、汝等はいたすべからず。物の具なせそ。弓箭帯しそ」とてむけられたりけるに、大衆かゝる内儀をばしらず、兼康がよせい六十余人からめと(ッ)て、一々にみな頸をき(ッ)て、猿沢の池のはたにぞかけならべたる。入道相国大にいか(ッ)て、「さらば南都をせめよや」とて、大將軍には頭中将重衡、副將軍には中宮亮通盛、都合其勢四万余騎で、南都を発向す。

(覚一本・巻第五「奈良炎上」 p.381) 2)

清盛は瀬尾太郎兼康に五百余騎を付けて南都に遣わすが、その際、衆徒の乱暴があっても武力に対応しないようにしろ、といった清盛の詞から明らかなように、この時点の清盛には南都を討伐しようとする意志はなかったということになろう。しかし、兼康勢の六十余人は、この旨を知らぬ南都の大衆に搦めとられて、頸を切られ猿沢の池のはたに懸け並べられることになる。そしてそうした一連の出来事に激怒した清盛は、「さらば南都をせめよや」といって、重衡を大將軍として南都を攻めさせるのである。

赤松俊秀氏が「清盛が憤慨して南都攻撃を命令したのは当然である³⁾」と評しているように、覚一本における南都討伐に至る経緯のこのような語り方から浮んでくるのは非難されるべき仏敵清盛の姿ではなく、辛抱強く事態に対処しようとしながらも南都の大衆の度重なる狼藉によってついに南都討伐を決意するに至った清盛の姿である。

語り本系の覚一本におけるこうした語り方に対して読み本系の諸本はどうなっているか。まず、延慶本では巻二末「南都ヲ焼払事付左少行隆事」にこう記されている。やや長くなるが、語り本系との違いを詳細に検討するため、全文を引用する。

又南都ノ大衆イカニモ鎮ヤラズ、弥騒動ス。公家ヨリモ御使シキナミニ被下テ、「サレバ何事ヲ鬻リ申スゾ。存知之旨アラバ、イク度も奏聞ニコソ及バメ」ナド被仰下ケレバ、「別ノ訴詔ニ候ワズ。只清盛入道ニ逢テ死候ワム」トゾ、只一口ニ申ケル。其モ直事ニアラズ。入道相国ト申ハ、忝クモ当今ノ御外祖父ゾカシ。其ヲ少モ不憚、カヤウニ申ケルモ浅猿シ。凡南都ノ大衆ニモ天魔ノ付ニケルトゾミヘシ。

言易洩者、招一禍之媒也。事之慎者、取敗之道也。

ト云ヘリ。只今事ニ会ナムズトゾ見ヘシ。其上、去五月、高倉宮ノ御事ニヨリ、三井寺ヨリ牒状ヲ遣タリシ返牒ニ、平氏ノ先祖ノ瑕瑾ヲ、筆ヲ尽シテ書タリシ事ヲ、安カラヌ事ニ相国被思タリケレバ、「是非有マジ、忿ギ官兵ヲ遣テ、南都ヲ責ベシ」ト云沙汰アリ。

且々トテ、備中国妖尾太郎兼康ト云侍ヲ、大和国ノ検非違所ニ成、三百余騎ノ兵ヲ相具セサセテ下遣ス。衆徒一切ニシヒズ、弥蜂起シテ、兼康ガ許ヘ押寄テ、散々ニ打散シテ、兼康ガ家子郎従三十六人ガ頸ヲ斬テ、猿沢ノ池ノハタニ懸タリケリ。兼康希有シニテ逃上ル。其後ハ南都弥騒動ス。又大ナル法師ノ頭ヲ造テ、「大政入道清盛法師ガ首也」ト銘ヲ書テ、毬打ノ玉ノ如ニ、アチコチ打蹴ケ踏ケリ。入道其ヲ伝聞テ、安カラ

2) 前掲(注1)書

3) 赤松俊秀(1980)『平家物語の研究』、法蔵館 p.376-388

ヌ事ナリテ、四男頭中将重衡朝臣ヲ大將軍トシテ、三万余騎ノ軍兵ヲ南都ヘ差向ラレケリ。(第二末「南都ヲ焼払事付左少弁行隆事」 p.557-558)⁴⁾

南都の討伐にいたるまでの記述は延慶本と覚一本とでは著しく違っていることになろう。すなわち、延慶本では南都の騒ぎを落ち着かせようと公家から使いが送られたが、衆徒から「別ノ訴詔ニ候ワズ。只清盛入道ニ逢テ死候ワム」といった返事だけがあり、使者が乱暴されたりしたことはここには記されていない。しかし、覚一本に見られる、最初の使いである別当忠成に恥をかかせた事件、次の使いである右衛門佐親雅に恥をかかせた事件が延慶本にまったく記されていないわけではなく、清盛と関連させられていない記事として、第二中「南都大衆撰政殿ノ御使追帰事」段に置かれているのである⁵⁾。撰政の派遣した使いが続けて乱暴された事件は、史実に照らして延慶本のほうが時期を正しく伝えているようであるが、覚一本はその事件を南都炎上事件の発端として設定することによって、南都討伐にいたる経緯の一つとする。そうすることによって、南都討伐の命令をくだす清盛の行為は一層当為性が付与される結果になったといえよう。また、この大衆の返事の後、続けて延慶本は彼らの言動に対して、下線のように非難の意を込めた文を載せている。しかし、安徳天皇の外祖父という身分の清盛に向った南都大衆の言動を非難する表現は、すでに覚一本でも確認されたものの、その非難の性格は大きな違いを見せている。すなわち延慶本はただ尊い身分の清盛に向った大衆の無礼を非難しただけであるが、覚一本は「球丁の玉」を清盛の顔と名付けて「うて、ふめ」などと狼藉を働く大衆の行為を非難したもので、延慶本と比べて、覚一本は享受側から大衆への非難の同調を確実に募ることは間違いないだろう。また、それは当然南都討伐に差し向ける清盛の行動に正当性を持たせることにも繋がっていくのであろう。

また、高倉宮反乱の際、三井寺からの返牒に清盛の先祖についての誹謗が記されたことを恨んで、清盛は兼康と共に三百騎の兵を遣わしたと言っている。公的な姿勢を保っている覚一本の場合とはだいぶ違って、延慶本の清盛は自分の家柄に恥をかかせたことに兵を遣わしたのである。つまり、私的な感情に取り付かれ行動する清盛の姿が浮彫されている。非武装の兼康軍を南都に遣わしたのは覚一本の場合、大きな球丁の玉を作って、清盛自身に侮辱をかかせた出来事の後となっているが、延慶本では公家からの使者に対する南都大衆の返事と清盛の先祖に対する誹謗の記事との後に載せられている。しかも兼康軍が非武装だったという言及がないのは、覚一本に見られるような、自分に対する侮辱を受けながらも兼康軍を非武装の状態に遣わした際の清盛の姿勢とは大きな違いを示していると言

4) 『延慶本平家物語』(編者 北原保雄 小川栄一 勉誠社、1990年)

5) 新潮日本古典集成『平家物語』は『山槐記』(治承四・五・二七)、『玉葉』(同日)の記事を根拠にして「南都蜂起を制止のため派遣された撰政の使者が相次いで乱暴されたのは、事実はこの時の事件ではない。半年前以仁王謀反に加担した時のことで、(中略)延慶本・盛衰記・四部本はその段階の時の事件として正しく記しているが、語り系では半年後の南都炎上という恐ろしい事態の引金に転用したわけである。」と注釈を付けている。

わなければならない。

また、南都の諸寺を討伐するよう重衡に命令を下したのがいつの時期であるかが注目を引く。つまり延慶本では派遣した兼康軍の壊滅、清盛に対する侮辱がそのきっかけになっているのであり、公的な理由よりは私的な意味が強く表されているのである。

このような両本のあいだにおける記述の違いを、各々の同系統の諸本から確認するに当たって、まず、語り本系を見ると、南都討伐に差し向けるまで、大衆の数回にわたる狼藉にも堪えていく姿が描かれている覚一本とほぼ同様に叙述されているのが流布本である。しかし、語り本系の諸本はみな覚一本と内容的に一致しているのではない。例えば、屋代本、百二十句本は、次のようにやや異なる内容を記している。

[屋]高倉宮ノ御事ニヨテ、南都、三井寺同心ノ間、南都ヲ可被攻トソ聞ヘケル。南都ノ大衆此之由承リ、ヲヒタ、シク騒動シテ、「只大政入道ニアヒテ死候ハン」トソ申ケル。摂政殿ヨリ、「存旨アラハ及奏聞ニ」トテ、「右衛門佐親政ヲ御使ニ被下タリケレハ、大衆発テ、「親政ヲ馬ヨリ取テ引落シ、本鳥キレ」ナント、ヨミケレハ、親政失色ヲテ逃上ル。其時勸学院雑色二人カ髻キル。大ナル吸打玉ヲ作テ、「是ハ大政入道ノ首」ト名付テ、「打テ、踏」ナント申ケル。此入道ト申ハ、忝クモ主上ノ御外祖ニテ御坐スヲ、南都大衆加様ニ申ケルコト、只天魔ノ所為トソ見シ。事ノ易洩ハ招禍媒ナリ、事ノ不慎ハ取破道也トモ加様ノ事ヲヤ可申。且鎮南都狼藉ヲテ、備中国ノ住人妖尾太郎兼康、被補大和檢非違所ニ、五百余騎ニテ発向大和シタリケルヲ、大衆起テ、兼康カ五百余騎散々ニ打チラシ、家子郎等廿余人カ頸ヲ取テ、猿沢ノ池俣ニソ懸タリケル。大政入道聞之給テ、争カ善トモ可被思、「サラハ遣討手ヲ」トテ、臆被指向討手。大將軍ニハ入道ノ四男頭中将重衡、薩摩守忠度、二人大將軍ニテ、都合其勢四万余騎、発向南都へ。(巻第五「南都滅亡事」 p.108, 110)⁶⁾

[百]都には、「高倉の宮、園城寺へ入御のとき、南都の大衆同心して、あまつさへ御迎へに参る条、これもつて朝敵なり。さらば奈良をも攻むべし」といふほどこそあれ、南都の大衆おびただしく蜂起す。摂政殿より、「存知の旨あらば、いくたびも奏聞にこそよばめ」と仰せけれども、ひたすら用ゐるたてまつらず。有官の別当忠成を御使にして下されければ、「しや乗物より取つえひき落せ。もとどり切れ」と騒動するあひだ、また南都には、大きな毬打の玉をつくりて、これは平相国の頭と名づけて、「打て」「踏め」なんぞ申しける。「言のもれやすきは、禍を招くなかだちなり。事つつしまざるは、敗れをとる道なり」といへり。この入道相国と申すは、かけまくもかたじけなくも、当今の外祖にてまします。しかるをか様に申しける南都の大衆、およそは天魔の所為とぞ見えたりける。太政入道か様の事ども伝え聞きて、いかでかよしと思はるべき。「かつうは南都の狼藉をしづめん」とて、備中の国の住人、瀬尾の太郎兼康を大和の国の檢非違使に補せられ、兼康五百余騎にて大和の国へ発向したりしを、大衆起つて、兼康がその勢散々打ち散らし、家の子、郎等二十余人が首を取つて、猿沢の池のはたにぞ懸けならべたる。入道相国大きに怒つて、「さらば南都を攻めよ」とて、やがて射手をさし向けらる。大將軍には入道の四男、頭中将重衡、副將軍には中宮亮通盛、その勢四万余騎にて南都へ発向す。

(第五十句「奈良炎上」 p.95-97) ⁷⁾

6) 『屋代本・高野本対照平家物語』(編者 麻原美子 春田宣 松尾葦江 新典社、1991年)

この屋代本と百二十句本の記事から確認されるように、まず覚一本では使いが二回にわたって遣わされ狼狽するのに対し、両本では一回しか遣わされていない。また、覚一本では大衆の騒動を鎮めるため、兼康を遣わす際、清盛が大衆の乱暴に対する武力的な行為を禁じさせたと記されているが、両本にはそれが欠けているので、当然武装軍と見なすべきであろう。つまり、屋代本では狼藉を働く大衆に対する清盛の忍耐の過程が相対的に減っていると同時に、宥和策に出ようとする清盛の姿が、薄れているといえよう。また、自分の首と名付けられた毬打の玉が踏まれたり蹴られたりする事件があったにもかかわらず非武装を命令したと伝える覚一本とは違って、屋代本と百二十句本のほうにはその清盛の命令が欠けていて、私的な感情を晴らすため公権力を投入したと一見認識されることも可能であろう。要するに非武装であれば公的で武装であったら私的だということではなく、清盛が自分自身に対する侮辱があったにも非武装、無抵抗を兼康軍に命令したことは私的な感情を排除して事態を解決しようとする清盛の意志が明確に示されていると見るべきではないかということである。つまり、屋代本などのようにそうした命令を欠いているのは私感に取りつかれて公的な官軍を遣わしたこととしても読まれる可能性があるのではなかろうか。しかし、確なのは、清盛が重衡軍に南都諸寺の討伐の命令をくだすようになったのは兼康軍が討たれたことが直接的な原因であった点である。すなわち、語り本系諸本では、清盛の忍耐の過程における異同はややあっても、私的な感情よりは公的な姿勢を保とうとした清盛の姿がクローズアップされて描かれていることは認めざるを得ないだろう。

では、こうした語り本系の記述と比較して読み本系の四部本⁸⁾、盛衰記⁹⁾、長門本¹⁰⁾に記されている経緯を見ると、延慶本とはまた異なる次のような記述になっている。

- 数百騎の妹尾太郎兼康軍の派遣(「長」には先祖の誹謗の後、清盛が兼康軍を派遣したとなっている)
- 妹尾太郎兼康軍の余勢廿六人の頸が切られる事件
- 園城寺の返牒に清盛の先祖についての誹謗が記載
- 清盛の首と名付けた大きな毬打の玉を作って、清盛を侮辱した事件
- 南都鎮圧のため、三万余騎の重衡軍を派遣(「長」には三千余騎となっている)

このように、四部本、盛衰記が延慶本とは異なるのは、清盛の先祖に対する誹謗の記事が延慶本のように兼康軍の派遣の前に置かれているのではなく、兼康軍の壊滅、自分の先祖に対する誹謗、また清盛自分自身に対する侮辱となっている。特に注目されるのは、

7) 新潮日本古典集成『平家物語』(校注 水原一 新潮社、1980年)

8) 『訓読四部合戦本平家物語』(編著者 高山利弘 有精堂、1995年)

9) 『源平盛衰記』(編者 池邊義象 博文館、1914年)

10) 『長門本平家物語』(名著刊行会、1974年)

天皇の外祖である清盛に向かった大衆の騒乱について諸本は非難の意を示すなか、盛衰記は次のように、その騒乱の当為性を与えていることである。

南都の大衆いかなればかく太政入道をば悪むらんと云ひければ、或人の申しけるは、理也、撰録の臣より始めて、南家、北家、花山、閑院、日野、勧修寺、前官、当職の公卿殿上人、十が八九藤氏として、春日大明神の氏人也。代々の国母、仙院、多くは此家より出で給へり。皇王と云ひ、臣公と云ひ、我朝の政事専此氏に在り、而るに平家世を取りて、万乗の世務を妨げ奉り、諸卿の理政を無代にすれば、国の為人の為、春日大明神、衆徒に替入らせ給ひて、かく騒動するにや有るらん、
(巻第二十四「南都合戦同焼失附胡徳楽河南浦の楽の事」 p.730)¹¹⁾

すなわち、「或人」の語りという型式を借りて、王朝的政治・社会の秩序から脱している清盛のありさまを批判した上、今の騒乱は春日大明神の意志の現れだと認識し清盛にむかった大衆の行為に当為性を示している。

南都諸寺の討伐を命令するこした清盛の態度には、兼康軍の壊滅に発する公的な意味も含まれているようにも読むことができようが、全体としては清盛自分自身の私的な怒りを晴らそうとした行為として強く印象付けられるといわざるをえない。また、清盛の南都討滅の命令が如何に私的な性格を持つのかは、盛衰記に「さもあらずとよ、日本国中に、此一門を左程に呪詛すべき者やはある」いか様にも南都には謀反人の籠りたと覚ゆ、追討使を遣わして攻むべし」と記されている。重衡に南都討伐の命令を下す際の、清盛の言葉を見れば一層明らかである。

3. 南都炎上の真相

南都焼き討ちの真相についてその時の指揮官であった重衡の語りがある。それは生捕りの身となって鎌倉に送られた重衡が頼朝と対面する場で見られるが、まず、覚一本(巻第十「千手前」)で確認すると、重衡と対面した頼朝は、「抑南都をほろぼさせ給ひける事は、故太政入道の仰にて候しか、又時にと(っ)ての御ばからひにて候けるは。も(っ)ての外罪業にてこそ候なれ」と、南都炎上の真相について問う。これに対して重衡は、

まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず、重衡が愚意の発起にもあらず、衆徒の悪行をしづめんが為にまかりむか(っ)て候し程に、不慮に伽藍滅亡に及候し事、力及ばぬ次第也。(巻第十「千手前」 p.261)¹²⁾

11) 前掲(注9)書

12) 前掲(注1)書

と清盛にとっても重衡自分自身にとっても南都炎上は思い掛けない出来事であったと主張し、最後は「たゞ芳恩には、とくとくかうべをはねらるべし」と語って、生捕りという「恥」を南都焼討に対する順現業¹³⁾としての必然の運命と受け止め、その順現業に身をまかせていくのである。これを流布本(巻第十「千手」)¹⁴⁾、百二十句本(第九十四句「重衡東下り」)などの他の語り本系諸本¹⁵⁾から確認してみると、さき覚一本で確認した頼朝の質問に対する答え、つまり、父清盛の指示によるものでもなければ自分の誤った判断からでもなく、不意の出来事だったとする重衡の答えはほぼ同じく記されている。

では、こうした語り本系の記事に該当する読み本系諸本の記事を確認してみると、まず、延慶本(巻五末「重衡卿関東へ下給事」)、長門本(巻第十七「本三位中将関東下向事」)には、南都炎上の真相に関する頼朝の質問は記されているが、それに対する重衡の答えが記されていない。そのほかに四部本(巻十「重衡・頼朝対面」)、盛衰記(遊巻第三十九「頼朝重衡対面の事」)には南都炎上に関する頼朝の質問もなければ、南都焼滅びについての重衡の言及も見当たらない。すなわち、語り本系は南都焼滅びのことを案外の出来事であると明確に示しているわけであるが、読み本系は頼朝の質問に対する重衡の答えを記さないが、それと関連する記述自体を欠くことで、南都炎上を清盛の罪悪として印象づける、といった読みも可能であろう。こうした両系統間の意図の異なりが認められるには、南都炎上の状況を記した諸本の記事が確認されなければならない。

南都諸寺の焼き討ちの状況を伝える諸本の記事をみても両系統間には看過できない異同が見られる。まず、覚一本には次のようにある。

夜いくさにな(っ)て、くらさはくらし、大將軍頭中將軍、般若寺の門の前にう(っ)た(っ)て、「火をいだせ」との給ほどこそありけれ、平家のせいになかに、播摩国住人福井庄下司、二郎大夫友方といふもの、たてをわりたい松にして、在家に火をぞかけたりける。十二月廿八日の夜なりければ、風ははげし、ほもとはひとつなりけれ共、ふきまよふ風に、おほくの伽藍に吹かけたり。(巻第五「奈良炎上」 p.382-383)¹⁶⁾

この記事によれば、火をつけたのは夜戦の暗さを解消するためであって、最初は民家に

13) 順現業(じゅんげんごう)―「仏語。この世で行なった善悪の行為のうち、その報いをこの世で受けるもの」(日本国語大辞典、小学館、1978)。また、池田敬子氏は「平家の重衡」(『国語国文』第四十六巻第三号 1977、p.23-27)で「清盛は南都焼打を第一とする数多の罪業によって無間地獄に墮すべしとの宣告をうけた。若い重衡は、今生で仏敵としての罪業の報いをうけねばならぬ。生捕をも含めて彼の以後の生涯は、順現業なのである」と論じている。

14) 『平家物語』(校注 梶原正昭 桜楓社、1977年)

15) 屋代本の場合には、他の諸本と同様南都炎上に関する頼朝の質問は見られるが、それに対する重衡の答えは欠く。

16) 前掲(注1)書

火を放ったのが、激しい風によって火がうつった、とされている。当時火をつけるように命令を下した責任者の大將軍重衡は勿論、清盛にもそれは予想外のことであったと言っている。またこの内容を他の語り本系の諸本から見ると、覚一本とはほぼ同じ内容を伝え、重衡軍が民家に火をつけたのは夜のいくさにおける暗さを解決するためであったこと、またそれが予想外に諸寺まで広がってしまったことを一律に語っている。特に屋代本と百二十句本の場合には、次のように、夜戦の暗さの中で味方同士の打ち合いを避ける意図で火を付けた、と夜戦での照明の必然性を説明する記事が付け加えられている。

[屋] 頭中將ハ般若寺ニ打立テ知セラル。十二月廿八日ノ夜也ケレバ、暗サハクラシ、
「カウテハドシ打出来テ悪カリナム。火ヲ出セヤ」と申程コソ有ケレ、幡摩国住人福井庄
下司、次郎大夫友方ト云者、楯ヲ破テ続松ニシテ、在家ニ火ヲソ付タリケル。折節北風
猛ウ吹テ、黒烟推覆ヒ、多クノ伽藍ニ吹懸タリ。(卷第五「南都滅亡事」 p.112)¹⁷⁾

[百] 夜いくさになりて、暗さはくらし、大將軍頭の中將、般若寺の門の外にうち立ちて、「同
士討ちしてはあしかりなん。火を出だせ」と下知せられけるほどこそあれ、(中略)在家に火
をぞつきたりける。十二月二十八日の夜なりければ、風ははげしく、火元は一つなりけど
も、吹きまよふ風におほくの伽藍に吹きつきたり。(第五十句「奈良炎上」 p.98-99)¹⁸⁾

しかし、語り本系諸本とは違って、次の記事で確認されるように、読み本系は夜戦の暗さを解消するためといった放火の理由も示されず、南都諸寺の炎上が予想外の出来事だと認識させるにも十分とは言い難い記述がなされている。

[延] 重衡朝臣ハ、法花寺ノ鳥居ノ前ニ打立テ、次第ニ南都ヲ焼払。軍兵ノ中ニ、幡摩
国福井庄下司、次郎大夫俊方ト云ケル者、楯ヲ破テ続松ニシテ、両方ノ城ヲ初トシテ、
寺中ニ打入テ、敵ノ籠リタル堂舎、坊中ニ火ヲカケテ、是ヲ焼。

(第二末「南都ヲ焼払事付左少弁行隆事」 p.559)¹⁹⁾

[盛] 幡摩国の住人福井庄の下司次郎大夫俊方と云ふ者、重衡朝臣の下知に依て、楯を
破りて続松として、酒野在家より火をかけた。師走廿日あまりの事なれば、折節乾の風
烈しくして、黒煙寺内に吹覆ふ。

(卷第二十四「南都合戦同焼失附胡徳楽河南浦の楽の事」 p.731)²⁰⁾

[四] 大衆禦き戦ふと雖も、大勢共責め懸りければ、面も向かへず、奈良坂・般若路より始
めて、打ち破りて、在々所々に火を懸けてけり。折しも風劇しくして、炎吹き負ひける上、
衆徒蜘蛛の子を散らすが如くに落ち失せぬ。(中略)而る程に、所々の城に火を懸けたり
けるが、一所に成りて、法華寺・東大寺・興福寺を始めとして、(中略)大仏殿以下一
字も免れず。(卷五「南都炎上」 p.207)²¹⁾

[長] 重衡朝臣は法花寺の鳥居の前に打立ちて、南都をやきならふ、軍兵の中にはりまの国

17) 前掲(注6)書

18) 前掲(注7)書

19) 前掲(注4)書

20) 前掲(注9)書

21) 前掲(注8)書

福井庄司次郎大夫俊賢といふ者、たてを破りてたいまつにして、両方の城を初として、寺中に打入て、敵の籠るたる堂舎坊中に火をかけて是をやく、(中略)十二月のはてにては有けり、風はげしくして、所々に懸たる火一にもえあひて、多くの堂舎にふきうつす、興福寺より始て、東金堂、西金堂、南円堂、七重の搭、二階楼門、しゅろう、経蔵、三面僧坊、四面廻廊、元興寺、法華寺、やしく寺迄やけて後、西の風いよいよ吹ければ、大仏でんへ吹うつす。(巻第十一「南都合戦同焼失事」 p.384)²²⁾

このように、火を付けた理由が記されず、盛衰記は「酒野在家」で、四部本は「在々所々」「所々の城」で、また長門本「両方の城」「堂舎坊中」に火を付けたのが激しい風によって寺々に広がったと伝えている。さらに延慶本は、「我心ニモ発ラズ、焼ケトモ云ザリシカドモ、多勢ナリシカバ、心ナラズ火ヲ出シタレバ、多ノ伽藍滅給ヌ」(第五末「重衡卿内裏ヨリ迎女房事」)と重衡の詞が記されて、最初から諸寺への炎上まで拡散することは意図していなかったといっている。しかし、最初火をつけたのが「寺中」「堂舎」である点から諸寺の焼き滅ぼしを予想外の出来事だったとする重衡の詞は十分な説得力を持つとはいえない。このような両系統間の記述の違いについて、赤松俊秀氏²³⁾は当時の史料を参照した上で、次のように述べている。

核心の三大寺炎上は攻撃当初から予定されていたかどうか、当時の史料では明確を欠くからである。『山槐記』も東大寺・興福寺の炎上は官兵・僧徒のどちらの所為か判明しない、とするしている。炎上が及ぼす影響の重大なことを考えると、当初からそれを予定して攻撃した、とは簡単に考えられない。炎上は偶然の結果に過ぎない、とするのが、現存支配的な見解である。『平家物語』でも語り系諸本は右にあげた見解をとり、覚一本によると、(中略)伽藍が炎上したのは、照明のために平氏側が般若寺門前の在家に放火したのが延焼したのであって、平氏勢が直接に火をかけたのではない。ところが読み本系諸本の記事はそれとやや異なっている。延慶本は兼康に対する無抵抗の嚴命を欠き、伽藍炎上も、攻撃手勢が直接に火をかけた、としている。語り系と読み本系との相違はここにも現れている(後略)

続いて赤松氏は、清盛が福原からの還都の交換条件として三大寺壊滅を約束し、それを実行したのが南都炎上であったと推測する。史実はどうであれ、読み本系諸本のこうした記事は、覚一本をはじめとする語り本系が予想外の出来事として記しているのとは大きく異なる記述であり、仏敵像と関連する清盛造型における両系統の志向の違いから発する結果と見なされる。勿論、読み本系にも、語り本系のように清盛が南都の焼き滅ぼしを命令したとする直接の記述はされていない。しかし、予想外の出来事であると明確に記述する語り本系と比較して、読み本系は放火の理由も示さず、舎堂など南都の至るところに火を付けるように躊躇うことなく命令を下す重衡の姿を記しているが、これはいうまでもなく享受側によって

22) 前掲(注10)書

23) 赤松俊秀、前掲(注3)論文

清盛の悪行の一つとして数えられ、仏敵としての清盛像を深く印象つけることになっているのであろう。

4. おわりに

すでに言及したように、平家一門の滅亡が清盛の悪行による因果的必然とする構図の上で創られた『平家物語』が、この南都炎上の原因を清盛一人の悪行に帰するのは当然であろうが、その構図を充実に守っているのは語り本系よりは読み本系のほうといえよう。

従来、平家一門を滅亡に導く清盛の悪行の一つとして捉えられ、彼を仏敵として位置づける証となってきた南都炎上をめぐる清盛像を考察してきたが、南都討伐の命令を下すまでの経緯を見ると、語り本系には個人的な怒りを押えながら南都を平静に戻そうとする清盛の意志が見られ、いわば公的な立場に立っている彼の姿が認められる。『平家物語』において、ある人物の言動をもって悪か否かを判断するのに、それが公的か私的かというのが一つの評価基準になっている傾向があるように思われる²⁴⁾。こうした『平家物語』における公私の観念と悪意識との相関性について堀竹忠晃氏²⁵⁾は次のように論じられる。

この悪の認識の問題は、公私の観念と極めて密接な結びつきを持っており、『平家』作者(编者)の意識構造として、清盛の一連の悪逆なる行為は、彼個人の、あるいは、平氏一門の繁栄にのみ腐心することからくる私的な執念であったという認識がある。(中略)
『平家物語』における善の観念の発生は、この私的な感情、エゴを払拭するところに端を発するものであった。

こうした『平家物語』における悪意識の上で、南都炎上事件をめぐる清盛の言動は如何に評価されるか。今まで諸本の記述上の異同を確認したところ、公的な姿勢を保つ人物として大いに示された語り本系の清盛には簡単に悪業者と定位しがたいものがある。その反面、読み本系の諸本には清盛の南都討伐の命令は、差し向けた兼康軍の壊滅と共に衆徒等の清盛自身に対する侮辱、または先祖に対する誹謗がその理由であるように記されている。すなわち、ここには私的な怨みを晴らそうとする存在としての清盛像が強調され、平家の凋落を清盛の悪行の因果的必然として構想し、それに充実に従っているのが読み本系であることは、この南都炎上と関連する一連の記事からもわかる。これは巻第六「入道死去」(覚一本の場合)で朝廷に対する清盛の姿勢と関連して、清盛に遺言を語らせる際、語り本系は公的、読み本系は私的な位相としての清盛を描き分けた両系統の相違に

24) 佐伯真一「重衡造型と『平家物語』の立場」(『国語と国文学』第六十二巻第九号 1985) p.31-33

25) 堀竹忠晃(1985)『平家物語論序説』、桜楓社 p.28-36

連なるものと指摘しなければならない。26)「南都炎上の責任は清盛・重衡にあると当時の人々は認識していた²⁷⁾」らしく、清盛に悪意を持ったか否かは別として、そのことは原平家物語の創作にも反映されたと思われる。そして、覚一本等の語り本系諸本もそうした構想の上で物語を展開しているようだが、南都討伐に至るまでの経緯を見ると、清盛に行為の当為性を持たせるような記述になっているには疑問を持たざるを得ない。これについては、清盛の悪行による報いとしての平家一門の滅びという構想を大枠では維持しながらも、清盛を乱世における為政者としても造型しようとした編著者の意志が、覚一本等の語り本系にはうかがえるということに、その答えがあるのではないだろうか。

【参考文献】

- ・ 渥美かをる(1979)『軍記物語と説話』、笠間書院 p.78-102
- ・ 渥美かをる(1962)『軍記物語の基礎的研究』、三省堂 p.23-39
- ・ 阪口玄章(1943)『平家物語の説話的考察』、昭森社 p.102-134
- ・ 杉本圭三朗(1985)『軍記物語の世界』、名著刊行会 p.72-85
- ・ 堀竹忠晃(1985)『平家物語論序説』、桜楓社 p.28-36
- ・ 赤松俊秀(1980)『平家物語の研究』、法蔵館 p.376-388
- ・ 武久 堅(1996)『平家物語の全体像』、和泉書院 p.32-55
- ・ 小林美和(2000)『平家物語の成立』、和泉書院 p.22-38、p.168-184
- ・ 五味文彦(1999)『平清盛』、吉川弘文館 p.301-315

26) 拙稿「『平家物語』諸本における清盛造型」(『日本文化学報』第六輯 1999)参照。一清盛は熱病に苦しむ中、自分の生涯を振り替えて語る内容を見ると、今まで平らげてきたのは、朝廷に逆らった朝敵であったと大体の語り本系には記されている反面、読み本系には清盛自分自身に背いた者等だとされている。これは清盛の姿勢を公・私的な観念と関連して評価する際、明らかな判断基準となるだろう。

27) 佐伯真一、前掲(注24)論文 p.31-33

要 旨

『平家物語』は清盛の悪行による平家一門の滅亡という構図をもった作品であることは大枠では認容できる。しかし、『平家物語』諸本の全てがこうした物語の構図のもとで清盛を描いているわけではない。すなわち、平家一門の凋落滅亡の因となるべきは平家の棟梁清盛の行為について、ある系統の本では正当性さえも一部感じさせる記述となっている場合もないではない。そうした清盛形象の違いを示すものの一つとして挙げられるのが南都焼滅という出来事と関連する清盛造型である。

南都大衆による騒動が起こったが、清盛の遣わした軍兵によって南都の諸寺は滅焼されてしまう。そして、こうした出来事は諸本に記載されているが、その過程については諸本ごとに異った内容で記されている。その異った内容については比較分析した結果、語り本系には個人的な怒りを押さえながら南都を平静に戻そうとする清盛の意志が見られ、いわば公的な立場に立っている彼の姿が認められる。その反面、読み本系の諸本には清盛自身に対する侮辱、先祖に対する誹謗等の私的な怨みを晴らそうとする存在として清盛像が強調されていることが確認された。平家一門の滅亡が清盛の悪行による因果的必然とする構図の上で創られた『平家物語』が、この南都炎上の原因を清盛一人の悪行に帰するのは当然であって、その構図を充実に守っているのは語り本系よりは読み本系のほうと言えよう。語り本系も一応清盛をもって一門を滅びに導く悪行者として造型して物語を展開しているようだが、南都討伐に至るまでの経緯をみると、清盛に行為の正当性を持たせるような記述態度を示していることには疑問を持たざるを得ない。これについては、清盛の悪行による報いとしての平家一門の滅びという構想を大枠では維持しながらも、清盛の悪行といった構想でありながらも彼の行為を擁護するような記述態度は、読み本系の因果的論理で物語の構想を図ったのとは違って、平家における鎮魂から発するものではなかろうかと思われる。

キーワード：清盛像 南都炎上 大衆の騒動 鎮圧過程 諸本

투 고 : 2008. 5. 31

1차 심사 : 2008. 6. 14

2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所 : 전남 순천시 덕월동 224-9 순천청암대학

電 話 : 061-740-7430

E-mail : harry5658@hanmail.net